

式 辞

日毎に暖かさを増し、春の息吹を間近に感ずる今日の佳き日、柏市立柏第五中学校長 富沢 泰介^{たいすけ}様、本校PTA会長 伊藤みどり様 をはじめ、多数の御来賓の方々のご臨席を賜り、千葉県立柏中央高等学校 第二十七回卒業証書授与式をこのように盛大に挙行できますことは、卒業生、保護者はもとより、私達学校関係者にとりましても、この上ない喜びであります。心より厚く御礼申し上げます。

ただいま、卒業証書を授与されました皆さん、卒業おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

皆さんが本校に入学し、この三年間勉学を続け、本校を卒業する日を迎えることができましたのは、皆さんの努力の賜物であるとともに、陰日向になって助けって下さった御家族をはじめ、先生方や地域の方々の御陰であることを忘れず、心から感謝しなければなりません。

保護者の皆さまには、お子さまの御卒業誠におめでとうございます。お子様は、御覧のとおり大変頼もしく成長なさいました。ここまでの三年間、保護者の皆様には多くの御苦勞もあり、感慨もひとしおのことと思います。卒業は新たなスタートでもあります。お子様は、希望に胸ふくらませ、新たな世界へ旅立とうとしています。お子様が、困難にくじけず、たくましく成長できますよう、尚一層の励ましとお力添えをお願いいたします。

さて、卒業生の皆さん、卒業式は、本校で学んだ皆さんが先生方や友人とともにお互いの学業の成就を喜び合い、別離の感をかみしめ、卒業後に踏み出すべき新しい人生への決意を固める場でもあります。また、御来賓や先生方より祝福や有益な御指導、御助言を贈られる高校生活最後の学習の場でもあります。

このような意義ある卒業式にあたり、所感の一端を述べ餞の言葉としたいと思います。某テレビ局でスタジオに持ち込まれた古美術などをその道の専門家が鑑定してみせる番組があります。この番組を見ていつも感心するのは骨董の部類に入る掛軸や壺などを鑑定する専門家のもを見る目の確かさです。偽物が多いと言われる骨董の中から本物をしっかりと見分けるのですから、その眼力は大変すばらしいものです。どのような修行を積みばそうなれるのか大変興味をそそられます。

本物を見分ける眼、すなわち目利きについては、文芸評論家の小林秀雄という人がその著作のなか

で次のようなことを書いています。小林自身も骨董にかかわったことのある人間ですから、骨董の世界のことはよく知っていたようです。

戦前は町の商店に奉公に入った少年のことを丁稚とか小僧とかいっていました。小林は、骨董屋の主人が丁稚を目利きにするためにすることは本物だけを見せること、言葉を換えて言えば、よいものだけを見せ続けることだと言います。その経験の積み重ねをとおして、本物と偽物を見分ける眼、よいものと悪いものを見分ける眼が自然と育っていくのです。そして、その反対はないとも言います。つまり偽物を見て目利きなれる者はいないということです。小林は、その理由については語らず、人間の眼はそのようにできているのだとしかいいません。骨董の世界をよく知った小林らしい言い方のように思われます。

ここで皆さんにお伝えしたいことは、だから本物やよいものを見なさいということだけではありません。

人の育て方の中には、合理的には説明できない育て方もあるということです。本物をみていると、なぜ目利きになれるのか。小林の回答は「人間の眼はそのようにできている」です。何事にも合理的な説明を求める現代人には最も納得しがたい回答です。

骨董の世界に限らず、その道の専門家は、長年の経験から、その道で人を育てる知恵のようなものがあることを知っています。その知恵は言葉で説明することはできませんが、確実に人を育てる知恵であることも知っています。

卒業生の皆さんがこれから旅立つ社会にもこうした知恵がたくさんあるはずですよ。

そして、そこで人が育つか、育たないかは、合理的な納得ではなく、先達の知恵を信じていることができるかどうかにかかっています。

卒業生の皆さんが、先達のすぐれた知恵に数多く出会い、そこで、ゆっくりと、一步一步確実に、成長されることを心から願っています。

終わりに、本校の教育方針を御理解いただき、これまで温かく見守ってくださった御来賓並びに保護者の皆様の御支援と御厚情に対し、衷心より感謝申し上げますとともに、御列席の皆様のお健勝と御多幸を祈念し、式辞といたします。

平成二十二年 三月六日

千葉県立柏中央高等学校長

牛口 敬一